

ムラまるごと棚田博物館構想による地域づくり くまもとけんくまぐんくまむら (熊本県球磨郡球磨村)

【取組内容】

ムラまるごと棚田博物館構想は、日本棚田百選の松谷棚田、鬼ノ口棚田を含む、数多くの景観的に優れた村内の棚田を野外博物館の展示物とみなし、生産者、村民、来訪者らがともに楽しみ、同時に地域活性化にもつなげようとするものである。

(取組1) 公式ガイドブックによる野外展示棚田へのいざない

- ・「球磨村の棚田22選」を平成23(2011)年に、「くまむら棚田9(サイン)物語」を令和4(2022)年に刊行した。棚田保存会を中心として村内関係団体、行政が連携して、コンサルに委託することなく2冊は作成された。棚田ファンが球磨村の棚田をガイドブック片手に、気ままに訪れ景観を楽しむ光景がみられるような仕掛けを講じた。

(取組2) 廃校舎を交流拠点とする都市農村交流

- ・田舎の体験交流館「さんがうら」が、廃校となった一勝地第二小学校をリニューアルし、農林業体験施設として平成23(2011)年に誕生した。ここを拠点に、松谷棚田での田植え・稲刈り体験、棚田ツアー、棚田オーナーの集い等のイベントを開催してきた。

(取組3) 棚田米のブランド化

- ・一社)くまむら山村活性化協会が、農泊推進事業により(観光地域づくり法人)として平成30(2018)年に誕生した。同協会は棚田保存会と連携して、9つの棚田および産出米の個別ブランド化に取り組んできた。



・廃校を利用した施設
(田舎の体験交流館「さんがうら」提供)



・棚田オーナー田植え風景
(田舎の体験交流館「さんがうら」提供)



大瀬棚田の風景と棚田米
一社)くまむら山村活性化協会提供

【取組に至った経緯】

球磨村農業振興アドバイザー会議は、ムラまるごと博物館構想を平成21(2009)年の農業振興計画の改定で初めて打ち出し、棚田保全を軸とする地域づくりに取組むに至った。

【取り組む際に生じた課題と対応】

- ・施設・機材導入の資金がない等の課題に対して、お金をかけない野外博物館とした。
- ・現地での案内板、のぼり旗の制作等の課題に対して、手づくりで進めてきた。

【取組の成果】

- ・さんがうら運営委員会が、令和2年度(2020)年全国豊かなむらづくり表彰で、農林水産大臣賞を受けた。
- ・棚田ツアー等の開催によって来村者が増え、交流人口や関係人口の増加につながった。
- ・棚田米のブランドによって、棚田地域や生産者の営農継続意欲が高まった。

【今後の展望】

- ・球磨村は令和2(2020)年7月豪雨災害の復興途中にあり、棚田の面積や耕作者の減少が懸念される。今後は耕作放棄地対策、獣害対策を含めた展示棚田の保全策を講じたい。

『民間業者が担う捕獲者の負担軽減のための体制づくり』 (福岡県糸島地区・添田地区)

【取組内容】

I C T機器を活用し効率的な捕獲を行うとともに、捕獲者の負担軽減を図るため、止め差し、放血から食肉処理施設までの運搬を民間業者であるALSOK福岡(株)が担う新たな体制で取り組んでいる。

【取組に至った経緯】

鳥獣被害対策により捕獲頭数が増えるものの、捕獲した個体の処分にかかる労力が捕獲者の負担となっていた。

また、食肉処理施設はあるものの、処理頭数が伸び悩んでいた糸島地区と添田地区において、捕獲後の処分を民間業者であるALSOK福岡(株)が担い、止め差し、放血から食肉処理施設への運搬を行いジビエとして有効利用する取り組みを令和2(2020)年度から開始した。

【取り組む際に生じた課題と対応】

民間事業者が捕獲とジビエ事業に参入する新たな取組になるため、地域の関係者（市町村、処理施設、捕獲者、農業団体等）で構成する推進会議を設置し、民間業者と一体となって計画を策定した。

ALSOK福岡(株)を対象に技術習得研修を実施し、捕獲技術や捕獲後の止め差し、放血等の技術を習得した。

効率的な捕獲作業を行うために、捕獲情報がスマートフォンに通知されるI C T機器を箱わなに設置することにより、見回り作業の効率化が図られるとともに捕獲個体の迅速かつ効率的な回収が可能となった。

また、ジビエ専用の保冷車を導入することで、衛生的なジビエ供給体制が構築された。



ICT機器を活用した箱わな



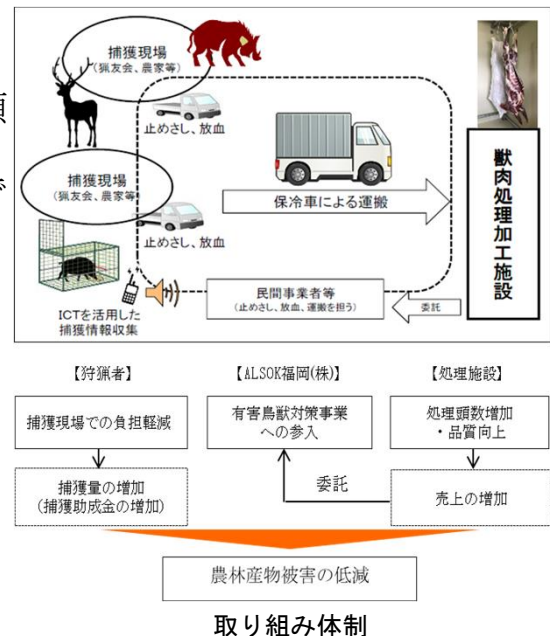
ジビエ専用保冷車

【取組の成果】

民間事業者の捕獲頭数が、令和2(2020)年度の56頭から令和3(2021)年度は195頭に増加しており、捕獲者の負担軽減に寄与している。また、食肉処理施設での処理頭数も、令和元(2019)年度の141頭から令和2(2020)年度は255頭に増加した。

【今後の展望】

持続的な取組とするために活動範囲を拡大し、捕獲、一次処理、精肉、販売量を増やしていく。



『農林業被害と世界自然遺産への影響を解決し
「ヤクシカ」の利用拡大と地域活性化に貢献』

株式会社屋久鹿ジビエ王国（鹿児島県熊毛郡屋久島町）

【取組内容】

ヤクシカによる農林業被害、自然環境及び景観への影響の問題を解決し、ヤクシカを食する食文化の定着や地域の活性化を目指し、平成29年に「屋久島ジビエ加工センター」を整備。島内外の飲食店等との連携、学校給食への提供など、屋久島のシカ肉の需要拡大及び認知度向上に貢献。

【取組に至った経緯】

ヤクシカによる農林業被害が増大する中、被害対策として捕獲した個体を自然環境や景観に配慮しつつ地域資源としてジビエ利用しヤクシカを食する食文化の定着や地域の活性化を目指し、平成29(2017)年に処理加工施設を整備した。

【取り組む際に生じた課題と対応】

安心・安全なシカ肉の提供を目指し、衛生管理基準及びカットチャートによる流通規格の遵守、適切なラベル表示によりトレーサビリティの確保等に取り組むことを目的に国産ジビエ認証を令和3(2021)年に取得している。厳しい衛生管理のもと、自社企画加工製品の製造やペットフードの企画開発にも着手している。また、処理加工残渣を削減するため、一頭まるごと、あるいは頭だけやスペアリブなどを動物園へ提供し有効活用している。

【取組の成果】

シカ肉の魅力を発信するとともに、卒業後の雇用につなげるため、島内の高校でシカ肉を通じた食肉文化の歴史などを学ぶ授業を継続的に実施するほか、全国への求人により屋久島町への移住と雇用の創出に貢献している。また、初心者に対して工場責任者の指導により、解体から精肉加工へと段階を踏んで技術向上に取り組まれている。

農作物被害が減少するとともに、捕獲頭数のうちジビエ利用された頭数の割合が、令和元(2019)年度の17.0%から令和4(2022)年度は22.6%に増加しており、島内外への販路が拡大する等ヤクシカを資源とした有効活用により地域の活性化に繋がっている。

【今後の展望】

屋久島内の飲食店や学校給食などでシカ肉の普及に努めるとともにヤクシカの利用拡大を図るために処理頭数1,000頭を目指し、加工品の商品開発、全国への情報発信により屋久島の地域活性化に尽力する。



屋久島ジビエ加工センター外観



高校生研修の様子



BBQセットはふるさと納税の返礼品としても高評価



農体験の様子

『九州より発信“シン（深・新・進）農泊”』 球磨川ふるさと食・農協議会（熊本県球磨郡あさぎり町）

【取組内容】

『シン農泊』には、農泊とは何かを深掘りし、新たな時代に向かって前進していくという思いが込められている。

1軒の古民家を再生した「食・農・人 総合研究所 リュウキンカの郷（熊本県球磨郡あさぎり町）」では、豊かな食資源・食文化に焦点をおいて、「食」をキーワードに多様多彩な地域資源との連携と活用を進め、観光コンテンツとして充実させ人吉球磨全域で広域連携による農泊事業を実施。

令和5年7月、熊本県球磨郡あさぎり町及び人吉市に九州7県より農泊実践者ならびに関係者が集い、シン農泊ミートアップ（語ろう会）が開催された。農泊施設「リュウキンカの郷」にて各地域での近況報告発表を行い、今後の課題や目標についての意見交換及び交流会を行った。

【取り組む際に生じた課題と対応】

農泊事業は、新型コロナウイルス感染拡大や多発する自然災害により大きな影響を受けた。特に人吉球磨は新型コロナが少し落ち着こうとした令和2年に球磨川の氾濫により甚大な被害を受けた。国内外の来訪者が見込めなくなった人吉球磨では、これを機に廃業する実践者も少なくなかった。

【取組に至った経緯】

大きなダメージを受けた農泊事業であったが、復興も進み、アフターコロナという新しい時代を迎えるにあたり、互いに近況報告をし、活気付け、『シン農泊』として再スタートを切るために開催された会であった。

【取組の成果】

- ・今回の集まりで九州管内の農泊実践者の方々が集まる事により生きた意見交換を行う事ができ、低迷していたモチベーションの向上へと繋がった。
- ・九州7県全県の農泊実践者の参加があり、各県の現状を知る事ができた。
- ・実践者らが自ら企画し、学び合う場を提供し合える関係性を構築する九州の農泊実践者ネットワークづくりに向け、土台づくりが出来た。

【今後の展望】

インバウンド客の急増により、注目され始めた農泊。国内外からの多種多様な訪問客を迎えるべく、宿泊、食、体験の農泊3要素の強化を図り、適正な価格で集客することにより、稼げる農泊を目指していく。

また、稼げる農泊になる事により、次世代の実践者を育成し、持続可能な『シン農泊』の推進を行う。



シン農泊ミートアップにて実践者の皆様により持ち寄られた料理の一部



実践者の皆様による近況報告発表（シン農泊ミートアップ）



囲炉裏を囲んで呑む球磨焼酎



棚田百選のさんがうらの棚田

『～誰一人取り残さない大隅半島の課題解決プラットフォームに～』 大隅半島ノウフクコンソーシアム（鹿児島県大隅半島）

【取組内容】

農業の労働力不足、福祉の販売力強化や障害者の低工賃という課題を解消するため、大隅地域で農福連携を実践している団体を結びつける大隅地域のノウフクプラットフォームとして令和3年に設立し、活動を開始。

令和4年度は、会員事業所及び支援機関、行政、アドバイザーと連携を図りながら、各種研修会や先進事例調査を行う一方、新たな取組としてノウフクJAS取得に向けた活動などを通じて農産物の付加価値向上・販売力強化に取り組むほか、コンソーシアム内での共同栽培やお試しノウフク、マッチング活動等を行った。活動を続けながら農家向けの研修会や観光庁の補助事業を活用したインバウンド事業をおこない、「農福連携×観光」の視点からも活動を展開。

【取組に至った経緯】

令和2年10月、県大隅地域振興局担当者と福祉施設職員から「大隅半島農福連携プラットフォーム設立構想」の提案があり、賛同した現コンソーシアムの役員はじめ関係機関が連携し、議論検討、課題共有を開始した。

【取り組む際に生じた課題と対応】

「小さいも」（小さくて出荷できないじゃがいも）をコンソーシアム全体で収穫し販売するフードロスノウフクの実施により福祉事業所の選択肢が増え、小さいもを使った販路拡大、子ども食堂などにも活用されるなど多様な繋がりを創出できた。

【取組の成果】

お試しノウフクや共同農場の試験的な運営により、障害者の方だけではなく、生活困窮者等にも農業をはじめめるきっかけづくりや、担い手不足の過疎地への援農、農福連携による就労の機会を創出できた。

会員間で新たに施設外就労契約が結ばれたり、会員同士のビジネスも生まれ、地域の農林水産業の維持・発展が図られている。

このようなユニークな取り組みが評価され、令和4（2022）年度「ノウフク・アワード2022」において、チャレンジ賞に選ばれた。



インバウンドツアー



ノウフクJAS研修会



じゃがいもノウフク【過疎地援農】



行政・JA・地元農家との打合せ



令和3年5月設立総会後の記念撮影



実施体制図



小さいもプロジェクトのフライヤー

【今後の展望】

大隅半島の農福連携推進はもちろん、会員各社の課題解決を図る一方、新たに農福連携に取り組みたい事業者へのサポート等をおこなうことで、大隅半島の農業振興にも寄与していく。

大隅半島の課題は農業と福祉以外にも多く存在する。これらの地域課題の中にも、農福連携を基軸にすることによって解決できる可能性が広がる。